

5. 湊のまくりの話

昔、本城村湊にお観音様のお堂がありました。そばに圓寂解空洞岩上座と刻んだ石塔が立っていました。しかし、それがどんな人であるのか今は誰も知っている人はいません。この湊の地は、昔は、芦が生い茂っていて、人は住んでいませんでした。その中を一本のミチが浜平浦まで通じていました。ところが、この道を夜通ると、丸い大きな鞠のような怪しい物が、芦の生い茂った中から転がり出て、人の足にまとい着いて、その道を通る人々を困らせました。近くの人たちは、まくりといって大変恐ろしがって、夜になるとこの道を通る人はいませんでした。

洞岩は、このことを聞いて、自分がそこに行って住むとそのような禍はなくなるだろうと、やがて、そこに庵を立てて移り住むところ、遂にそのような怪しいことはなくなって、これから後は、人々も住みつくようになって、今のような里になったのだと、ここの人たちは言い伝えています。

洞岩の人とはどんな人であったのか知ることが出来ませんが、大よそ、仏の道は便宜によって教を説くものでありますから、このような怪しげなことを、自分の修行によって鎮めることで、自分を人から尊ばれるために言ったのか、または狐が怪しいことをして人を欺くことを知って狐を鎮める業を行ったのか、どちらともいえないと或る人が語ったと言います。